

# マス・メディア表象研究における カルチュラル・スタディーズの意義

——スチュアート・ホールの文化的アイデンティティ理論をてがかりに——

新嶋良恵



## ▶ 1 問題の所在

人種概念は、マイノリティと規定された集団に対して与えられるメディア表象 (representation<sup>①</sup>) と切り離せない関係にある<sup>②</sup>。人種の枠組みによってマイノリティとして規定される人々をめぐるマス・メディア表象を研究の対象として扱う場合、人種という概念自体にも注目する必要がある。人種という概念は、現代においては社会的に構築されたものとして、その普遍性を否定する試みが何度も行われてきた。しかしながらアメリカ合衆国において、こうした人々を分節化し集団として規定する枠組みは依然公的な場<sup>③</sup>でも使用され、強大な力を発揮する<sup>④</sup>。個々の文脈に合わせ、人種もしくはエスニックという名前が変わりながらも、何らかの特徴に基づいて人々の差異を強調し分節化 (articulation) し、人々の間に境界線を引くというその機能は維持されてきた。本章の目的は、メディア表象の持つこうした規定性について考察することにある。具体的には、ある言説が優先的に採用され、他の「読み」を退け、世論を勝ち取っていく過程を分析し、「意味をめぐる闘争の場<sup>⑤</sup>」に関わる問題としてマイノリティをめぐるマス・メディア表象を論じることの意義について示す。

「意味をめぐる闘争の場」、すなわち権力が展開される「場」としてのマス・メディアとは、「敵対しあう社会的勢力はある言説を自らの言説に結び付け世論を勝ち取ろうとする」(Laclau 1977) というラクラウの議論に基づいてスチュアート・ホールが提起したものである。これは、マス・メディアを対抗的勢力がコミュニケーションを通して闘争を繰り広げる「場」とする考えである。こうした考えは、マイノリティによるアイデンティティ・ポリティクスについて深い考察を行ってきたホールが後期において到達した視点である(山腰 2012)。社会が言語的に構成されているという言語論的展開を経た後の表象概念をとり入れながらも、なお、主体が歴史を背負い歴史を形づくるという、主体化のプロセスにこだわったホールの指摘は、メディア表象と人々の関係を考えるうえで示唆に富むものである<sup>⑥</sup>。しかしながら、現在のマイノリティの表象を扱ったメディア研究及び、社会学におけるエスニック研究の中でもその意義は十分に評価されてきたとは言い難い。それは従来のマイノリティをめぐる表象についてのメディア研究が人種主義に対する批判にその力点を置いてきたことが一つの原因と考えられる。メディア・コミュニケーションの研究の中で人種やマイノリティに対する表象が対象として研究されてきたというよりは、社会運動論に近い形でこうした題材が扱われてきたことがそうした現状の一つの原因だと考え

られるのである。カルチュラル・スタディーズ（以下CS）やエスニック・スタディーズ（以下ES）といったマイノリティを扱った近年の研究の多くが、差異のみを叫ぶ社会運動と化しているとの手厳しい指摘は、研究を行ってきた研究者自身によって行われてきた<sup>7)</sup>。アメリカ合衆国において特にみられるような、当事者ともいえるエスニックな出自を持つ研究者の手によって行われる丁寧なマイノリティ経験の記述というものは枚挙をいとわない（今後さらに蓄積されることは必要だが）。しかしながら、今起こっている事象が、歴史に照らしてどのような意味があるのだろうかという問いに迫るには、表象のされ方を規定する社会的要因についても視野に入れた研究が求められるだろう。

そこで本章では、「文化的権力がせめぎあう表象をめぐる闘争の場」としてマス・メディアを見据えたホールの表象研究を見直し、そうした「ポリティクスとしての表象」という観点からマイノリティ表象を研究することが果たし得る理論的貢献について、考察を試みる。

## ▶ 2 カルチュラル・スタディーズのメディア表象研究

メディア・コミュニケーション研究における「表象」の問題を扱った研究として、CSの功績は大きい。以下では、CSとほぼ同時期に発展したスクリーン研究と、それに対する批判を通してイデオロギーに自ら寄っていく主体構成のメカニズムについて解明を試みようとしたホールの企図について概観する。

### 2-1 スクリーン研究

マス・メディアにおける表象をめぐる主体の問題は映画雑誌『スクリーン』などで活躍した研究者によって盛んに議論された。映画教育者のための雑誌『スクリーン』は、フランスの（ポスト）構造主義理論（特にラカン派の精神分析）を、1970年代のイギリスで最初に紹介したものの中の一つであるという（粟谷 2002: 30-31）。スクリーン理論の論者としては、スティーブン・ヒースやコリン・マッケイブが象徴的で、ヒースによる *Question of Cinema* (1981) が代表的な著作としてあげられる。

彼らはルイ・アルチュセールの「国家のイデオロギー」論やラカン派の精神分析など構造主義理論を積極的に援用した。その目的は、主体の位置の生産を通じてフィルムの中の観客を縫いつけながら、彼らのうえに映画のテキストが主体性を授ける象徴的メカニズムを暴露することであったという（Moore 1994）。こうした研究において、主体化の過程を考える際に重要とされてきたのはアルチュセールの「イデオロギー装置」と「呼びかけ」の概念である。これによるとテレビや映画のスクリーンはイデオロギーを伝達する「装置」として「呼びかけ」を行い、「呼びかけ」られることによって観客は「主体」となるというのである。そしてイデオロギーは「主体」への「呼びかけ」によって成り立つとされる。ラカン—アルチュセール派による『スクリーン』での論文や、*Question of Cinema* (1981) を発端に、ヒースとノエル・キャロルの間で論争が展開され、デイヴィッド・ボードウェルなども批判を加えている。さらには、アルチュセールを引き継いだ論者たちは、主体が映画のメッセージをそのものとして受け取る、受動的な存在として前提されていて、その主体構成は「差異」を孕みうるその他のテキストや言説の介入を無視しているとの批判が提出された（Morley 1980:163）。

こうした矮小化された表象研究は、個人の意味創造の可能性を主張する文化主義の立場のみならず、「テキスト至上主義」としてCSの代表的論者からも批判がくわえられた（Hall 1980a; Morley 1980）。テキストの状況定義と意味解釈をめぐる闘争過程の分析するための「エンコーディング・デコーディング・モデル」というスチュアート・ホールが提唱

したメディア分析の理論枠組みは、CSが企図するようなテキストの外部にある諸局面を捉えるものとなる可能性があったが、実際には受け手の主体性を無視し、テキストによる決定性を導くような研究へと移行してしまった（岡井 2004）。ホールは、人々がイデオロギーに組み込まれるだけの従属的な身体ではないことを指摘しようとした。それと同時に主体として、イデオロギーに迎合してしまい、自ら規則に同意するそのメカニズムについての考察を行うことの意義について論じてきた。そのような試みの一貫としてホールは、スクリーン研究で見られるような「呼びかけ」を援用した研究が、受動的に構成される「主体」のみに注目するあまり、さまざまなテキストが絡み合い社会的関係を構築するという文化的実践の側面を見落としてしまいがちだとの指摘を行っている（Hall 1980a: 159-161）。スクリーン理論が映画の表象にあまりにも決定的なイデオロギー再生産の機能を与えていると批判したのである。

## 2-2 アメリカのカルチュラル・スタディーズ

「表象」とは、記号を通じて事物、事件、人物、そして現実が記述され、表現され、意味構成される過程として定義される（Hall 1997: 24-25）。こうした定義をした、ホールの「エンコーディング／デコーディング」モデルは、メディア・オーディエンスを能動的なメッセージの「読み手」とし、支配的イデオロギーに対する対抗的な主体として位置付けるCSのコミュニケーション論として受容されてきた（Morley, 1992; Fiske, 1987=1996; 藤田, 1988）。英国を中心にメディアや大衆文化を論じていたCSは、アメリカ合衆国で受容されていく中で、関心の拡散が起こり、その論点がずれていくというような独自の変容を遂げた。「CSをどうとらえるか」という論文の中で山田晴通は以下のようにアメリカでのCSを評している。

ここでは、ジェンダーやエスニシティの問い直しをひとつの突破口として、ポスト・コロニアル状況の諸問題など、英国CSでは目立たなかった新たな問題意識が前面に出てくることになった。一九九〇年には、国際シンポジウム「CSの現在と未来」がイリノイ大学で開催され、二年後には、そこでの報告を踏まえた四十本の論文を集めた大部の論集が刊行されたが、その内容は、あたかも玩具箱をぶちまけたような、ポストモダン言説の百家争鳴となっている（山田 1996: 41）。

吉見によると狭義のCSはイギリスから世界に広がり、80年代のアメリカにおいて、フェミニズム・エスニック・マイノリティという文脈で有効に使われたという（吉見 2001）。そして現代では、山田が先のように述べているとおり、アメリカにおいてその理論的發展はほとんど止まってしまっているといえるだろう。

何しろCSは、普遍的と考えられてきた近代的諸概念を、人権、民主主義、学問、といったものまで含めて、欧州の偏見、白人性に基づく特殊なものにすぎない、と論じる地平にまで到達しているのである。英語圏を中心とするCSは、折衷的ラディカル言説に無差別に貼り付けられるレッテルにすぎず、英語帝国主義を背景としてグローバル化した知的ファッション以上のものではない、といった自己言及の結論さえ、CSの射程には入ってくる。普遍主義（カトリシズム）に対する異議申し立て（プロテスタンティズム）が、CSには本質的に組み込まれている（山田 1991: 43）。

こうしてCSの理論的發展への閉塞感が指摘される一方で、アメリカにおいては、マス・メディア言説の表象問題を扱った研究として、アイデンティティ・ポリティクス以後興隆したES<sup>®</sup>に影響を受けたメディア研究が広がった。次に、そうした研究の動向と問題点について考察する。

### ▶ 3 エスニック・スタディーズにおけるマイノリティ表象研究とその問題点

アイデンティティ・ポリティクス以後興隆したES<sup>9)</sup>の分野でも数多くのメディア表象分析が行われてきた。ESとは、1960年代の公民権運動の流れの中で発展した「学問」領域である。これはエスニシティに関する研究ではなく、米国の黒人系、ヒスパニック系、アジア系などのマイノリティ集団が自らの歴史や文化について学ぼうとする運動であるとされる(関根 2003)。ここではそれぞれのエスニックグループの観点から歴史を書き換え伝えていくことを目的としているという(桑野 2007: 1)。これらは、冒頭で述べたように60年代頻発した「エスニック運動」の一環として提起され、各エスニックグループの地位向上のために行われている「研究」であるとしていまだ論争の渦中にある(桑野 2007)。しかしながら、人種マイノリティの歴史や同時代的状況を「エスニック」な経験として解釈する枠組を定着させ、多元的なアメリカ社会像の構築に大きな影響を与えた点からも、こうした領域の貢献を無視することはできない(南川 2003)。

ESの問題点としては以下の二つが指摘できるだろう。①表象者が極端に消極的に描かれること。それと同時に②能動性を強調するあまりかえってマイノリティの差異性の強調につながり既存の人種・エスニック的境界を再生産してしまうこと。これら二つからも明らかのように現段階でのESは、ホールが試みた、呼びかけに応じていかにして主体が位置取りをするのかという主体化のメカニズムについての解明に迫るものではない。以下ではESが抱えるこうした課題について検討を行う。

#### 3-1 消極的な行為者像という問題

ESの領域における表象研究とは主に人種的ステレオタイプに注目する研究である。エスニック・マイノリティと位置づけられる人々が、人々が日常で出会う差別の経験に注目し、表象が実際にもたらす影響について注目してきた。こうした人種的ステレオタイプ研究は、表象に見られる人種主義を批判的に検証する一定の役割を果たしてきた。

しかし、これらの研究で描かれる被表象者像とは、従来の人種差別を巡る研究と同様に表象と自己の乖離や、歪曲化された集団へのまなざしに苦しんでいるマイノリティとしての主体である。これらの研究で描かれる被表象者像とは、従来の人種差別をめぐる研究と同様に、表象と自己の乖離や、歪曲化された集団へのまなざしに苦しむマイノリティとしての主体である。こうした表象の「誤り」や「歪曲」を指摘するにあたっては、被表象者の「真の姿(authenticity 真正性)」が想定され前提とされているという問題がある(Shohat and Stam 1994; Shohat 2008)。さらには、コミュニケーション過程の観点からも十分な議論が行われているとは言えない。誤った表象に苦しむ一枚岩な被表象者像という主体設定の問題は、マイノリティに関するステレオタイプ研究が、1960年代後半から70年代にかけてアメリカ社会学を中心に興隆を極めたレイベリング論にその理論的親和性を持つことに起因している。被表象者は被レイベリング者同様その行為者像は受動的なものとの前提に基づいた研究が多数であるというのが現状である(佐藤 1994)。レイベリング論の基本的命題は、①相互作用過程におけるセレクトティブ・サンクション(レイベリング・プロセスの対他的側面)と②被レイベリング者のアイデンティティ形成(レイベリング・プロセスの対自的側面)の二つに整理されるのだが、伝統的実証主義で看過されてきた他者の反応に注目しようとするあまりに、行為者像は極端に受動的なものとなり、後者の命題が軽視されていると指摘される(佐藤 1994)。「ネガティブなカテゴリーを付与された人が、なぜ自らの価値を貶めるようなカテゴリーに主体的にはなりこみ、予言を自己成就させる方向でのパフォーマンスを行ってしまうのかの説明されない」(佐藤 1994)という、レイ

ベリング論に対する佐藤の批判点を、被表象者の被差別的な日常を描くことに力点を置いたESは引き継いでしまう。

以上のようにこれらのESにおけるメディア表象研究の多くが設定する被表象者主体像は、特に二つの問題の前者—①表象者が極端に消極的に描かれるという問題点—を抱えている。CSが発見したようなメッセージの送り手と受け手の間に生まれる意味構造のズレといった読みの多様性といった視座は希薄である。

### 3-2 人種・エスニック的境界線の再生産という問題

CS的な表象分析の問題点と課題として、政治・経済的な組織や制度の次元が等閑視されているとの批判がある。その内容はというと、文化と表象への関心に比較して生産や規制についての分析が乏しいというものである。「メディアを介して社会・文化事象の表象に注目し、それら表象の社会に流布や人々による消費を分析の主たる対象とするCSにおいては、文化を経済的生産過程や政治的規制状況の分析が必ずしも十分に為されていない。だがしかし、文化と権力の関係を解き明かすうえで、生産と規制の側面の分析こそが不可欠である」(阿部, 古川 2011: 75)という指摘がなされてきたという。こうした論拠に基づく批判が、主として伝統的な政治経済学 (political economy) の分析方法に基づきメディア文化研究に従事する研究者たちから投げ掛けられてきた。

それに対してESでは、1960年代以降、市場・経済という視点からのエスニック集団に関する議論が活発に交わされてきた。その理由の一つは、エスニック集団が社会的上昇理論のなかで注目されてきたことがある。つまりは、自営業や小商店に従事することが、アメリカ社会で不利な立場に置かれてきた移民やマイノリティの経済的上昇の手段となると見なされていたのである (Glazer and Moynihan 1963)。また、特定の移民エスニック集団が経済的成功に導いたものとして、エスニックという紐帯により生み出される結束や特性を挙げる社会学者も存在した (Light 1972; Portes and Bach 1985)。こうした主張は、文化的分業論やエスニック集団競合論と密接に結びつくことが明らかだろう。エスニック集団競合論は、人種やエスニシティを定義する場合、主義的な立場を採用し、感情表出的で存在集団としてのエスニック集団と考えがちな原初的特性重視論に反対して、利益表出的で目的および機能集団としてエスニック集団をみなし、その道具的性格を強調するという (関根 1994: 135)。関根の整理によるとこれら二つの学説は、第一に、心理・生物学的な学説と異なり、エスニシティの主観的・合理的側面を強調していること、第二に、古典的マルクス主義研究と異なり、人種・エスニシティへのこだわりは、資本家階級の操作による虚偽イデオロギーであるとネガティブに見るよりは、従属的な地位から脱出するために積極的に利用すべきものとみる点、第三に、文化的分業や国内植民地状況の形成に関して、ほぼ一致した見解を示しているという (1994: 146) <sup>(10)</sup>。

また、「エスニック間競争モデル」は自分たちの文化的特性やネットワークを活用し、他のエスニック集団との競争を勝ち抜こうとする移民エスニックの姿を描写するものも提唱された。それは上記の二つのモデルの要点を掛け合わせ、さらには白人—黒人という二つの人種間に限らず異なるエスニック・マイノリティ集団間の関係を考察する上で出てきたものといえるだろう。このエスニック間競争モデル <sup>(11)</sup> が現れた背景として、1970年代の、異なるエスニック集団間における一触即発もいえるような状況がある。黒人、白人、ラティーノ・ヒスパニック、その他の少数エスニック集団 <sup>(12)</sup> が互いに争って、職業、治安、信望、居住スペース、政府の保護を奪いあうような状況である (Edsall and Edsall 1995:167)。その要因とは、週給が下がり労働者階級の雇用市場が縮小したため、政府が少数エスニック集団の雇用促進を目指して介入を強化したことが一つある。さらには移民政策の変更で、多数のラティーノとアジア系の移民に合法的な就職活動を行う機会が与え

られたほか、メキシコとの間にある国境を越えてくる不法入国者が増加したこともある。同時に、それまで公民権運動を擁護してきた弁護士や活動家が、今度はそれまで社会から締め出されていた階層の権利と拡大することに焦点を当てるようになったこともあげられる(Edsall and Edsall 1995:167)。

また、移民が集中する「多民族都市」など特定の地域では、自らが経営者として自営業やスモールビジネスを興すものも少なくなく、雇用者と労働者という立場の違いの中でも、他の移民エスニック集団との競争や、調和・祖語などの社会的課題が出てくることは避けられないだろう。ここで紹介するエスニック間競争モデルとは以上のように、経済的観点から、市場でのエスニック間関係を考察する理論モデルだといえることができるだろう。

こうした競争のモデルは、必然的にエスニック集団内での序列階層について関心を持つことは明確であろう。このモデルでは、人種・エスニックをもとに分節化された集団間で行われる経済的競争に注目し、異なるエスニック集団の社会的・経済的地位が考察される。そして集団内における行動や態度のみに注目するのではなく、社会的・経済的地位の違いから集団同士の接触の様子を読み解こうとする。こうした見方は「人種ヒエラルキー(racial hierarchy)」モデルとも呼ばれている

ところで、競争モデルから想定される序列階層は、アジア系の人々にユニークな位置を与えてきた。それは、「緩衝ゾーン(buffer zone)」といった、白人と黒人の間の位置である(E.Kim 1997)。または、マツダの言葉を借りれば「エスニック・ブルジョワジー(racial bourgeoisie)」というような、いわば「ミドルマン(middle man)」としての立場である(Matsuda 1993)。つまり、アジア系アメリカ人は、何人かの研究者が「アメリカ社会での地位を考えると実質的には白人ともいえる」と主張するのに反して、人種ヒエラルキーの中で白人と黒人の間の第三番目という特異な位置を埋めているものとされるのである。こうしたアジア系の微妙な関係性に注目する論者に共通していることは、アジア系の人々の経験というものは白人のそれとも黒人のそれとも異なっており、重要なのは白人—黒人人間の関係によってアジア系の経験が条件づけられているということであるという(C. Kim and T. Lee 2001:633)。こうした視点は、そもそもアジア系に注目した人種差別に関する研究が少ない中、示唆に富むものだといえよう。

近年では、エスニック・マイノリティ表象の戦略的利用を奨励するというESの立場からアジア系表象に注目し研究を行う研究も少なくない。例えば、マイノリティの社会的地位向上のために行われるエスニック集団としての地位の利用と人種間闘争という観点から、アジア系アメリカ人が訴訟裁判の考察を行ったRobles(2006)がある。Roblesによると、裁判の原告である中国系アメリカ人は、自分たちが「優秀であるアジア系」としてまなざされることによって、アフーマティヴ・アクション(以下AA)<sup>(13)</sup>の適用対象から排除され、さらには他のエスニック集団(黒人、ラテン系)の入学を優遇する上での犠牲となり希望する学校への入学を拒否されたと訴え起こしたという。AAのいわば「逆差別」はその多くが白人訴訟を分析の対象としていたが、この研究は、アジア系の人々が起こした裁判を追ったものであった。原告であるアジア系アメリカ人たちは、自らを「AAの被害者である」と主張し、新保守主義的言説を戦略的に活用したという視点から考察が試みられている。つまり、「優秀であるがゆえに福祉政策から排除される中国系アメリカ人」として裁判に臨んだとの考えに基づき考察は進められていた。そして、この裁判に代表されるようなアジア系の人々の運動により、「AAはアジア系を差別する不当な政策だ」という認識が定着したのだという。もちろんそうしたアジア系の人々による運動がAA自体に対する一般認識を変化させる力を持ちえたのは、その裁判を報道したメディアの役割が大きかったことは容易に想像され、Robles自身もその点については影響があったと著書の中で述べてはいるが、特にメディア報道の内容や運動にかかわるエスニック集団がい

かに報道されていたかなどといった詳細な分析が行われてはいるわけではない。

以上みてきたような、ESにおける研究の多く見られるように、エスニック・マイノリティはエスニックであることを強調し、そうした立場を戦略的に利用することに活路を見出すべきだとしてしまうことによって、マイノリティであるという位置づけ自体が元々白人に、そしてマス・メディアという人種ヒエラルキー上位の者から付与されたものであるという、表象が構築されるという暴力性に迫りきれない、という危険性が指摘できよう。これらは、エスニック集団をその分析対象とするのだが、その際、そうした集団がどのように規定され、そうした集団に身を置く人々がどのようにエスニック主体としてのアイデンティティを自覚しているかということについて問うものは少ない。

この分野における研究は、エスニックと位置づけられた被表象者の能動性をあまりにも強調するものであり、表象自体の構築性・規定性という構造的差別の問題を見落としてしまうことが懸念されるのである。マイノリティ集団に対して与えられる表象は集団を普遍のものとし、個人の特性を帰属する集団に起因するものとして結びつけ、集団的特性を強調し、使用され続けてきたという点は周知のとおりである。それが歴史的な重みを持った構築物であり、マイノリティをマイノリティとして位置づけ続ける力学として捉えることが今後さらに求められる。

### 3-3 歴史的構築物としての人種・エスニック概念へ

人種的ステレオタイプ研究の問題点について Shohat と Stam は以下のように論じている。ひとつは、ステレオタイプを歴史から切り離し固定的であるものとして捉えることにより、本来それが告発するはずの本質主義に迫りきれないというものである (1994)。

多様な背景を持つ黒人やラテン系、またアジア系の人々がそれぞれの人種・エスニックとして大雑把にひとくくりにされることは、暴力的であり、それぞれ区切られた人種・エスニック集団の内部での格差についてはこれからも正確に記述されることが求められるだろう。しかし、こうした表象が「誤り」であり、事実を「歪曲」するものとして訴えていくことは、先の Shohat と Stam が指摘するように「真正性の設定<sup>(4)</sup>」という問題を孕みうる。エスニック・マイノリティの「真の姿」が想定されたうえでそれを「歪曲」するものとして表象が批判されるのである。また、こうした「真正性の設定」により、本来は構築物であるはずで変更可能な人種・エスニックという枠組みで仕切られた人々の間の境界線は再生産・強化されていくという問題も抱え込んでしまう。マイノリティに親和的な ES の研究者たちが既存の言説を用いてマイノリティ表象に異議申し立てを行っていきによって皮肉にも、マイノリティの差異性を強調し、アメリカ社会において存在する人種の境界線を強化・再生産するに至ったと指摘せざるを得ないのである。

集団内に限らない共通点—すなわち同じマイノリティ集団としてアメリカ社会において位置づけられることや、女性であること／男性であること、労働者であることなどは集団内での別の関係は連帯の根拠になりうる可能性もあるが、そうした可能性は人種アイデンティティへの固執によって弱まってしまう点も否定できない。アメリカにおける人種概念とアメリカ化の力学について研究した川島は、「多分に情念に訴えた『ブラック・パワー』の叫びにも、否定できない側面として、『生得的』または『歴史的な差異』に基づく『アイデンティティ』政治の高揚によって、階級やジェンダーといった、被抑圧者や被差別者にとってより普遍的な連帯の根拠となる別の選択肢の可能性を結果的に狭めてきた面があるのも事実であろう」と論じている (2005: III)。

境界線の強化・再生産とは、本来なら、同じ虐げられたマイノリティとしてアメリカ社会で協力すべき多くのマイノリティ集団が、表象により差異性を強調され、互いを異質なものとして見なすという意味においてである。さらにはそうした表象により明らかにさ

れるそれぞれの人種・エスニック集団の社会的位置づけは、マイノリティ集団の間における新たな闘争を生み出す火種ともなりうるのである。研究者が、自身が帰属するエスニック集団について研究し、細分化を遂げるこのESという領域では、表象と社会の関係が分析されるというよりは、社会運動としてアジア系の人々の多様性を強調し、それぞれの集団の可視化を図ること、そして、そうしたエスニック性を強調した運動を通して、社会における権利の最大限の獲得が目指されてきたという側面がある。

歴史的に構築された表象の構造の中で、被表象者の能動性の契機をいかにして見出していくかがESの今後の課題としてあげられるだろう<sup>(15)</sup>。

## ▶ 4 ホールによる文化的アイデンティティ理論と言説編成理論の可能性

ここまでCSによる表象研究、及びそこから派生して発展したESによるマイノリティ間関係についての研究について考察してきたが、以下ではスチュアート・ホール自身のメディア表象研究を見ていきたい。まずはホールによって提示された文化的アイデンティティ概念についての理解を進めたい。具体的な分析の考察を行う。

### 4-1 文化的アイデンティティとしてのエスニック・マイノリティ

ホールは「文化的アイデンティティとディアスポラ」において「文化的アイデンティティ」を考察する二つの立場を提示している。

第一の、文化的アイデンティティを「一つの真なる自己」とする立場は、一つの共有されたある種集合的な共通の歴史と祖先をもつ人々が共有しているものとする (Hall 1990)。そして再発見された本質的なアイデンティティは、安定した普遍的認識論的枠組みと意味を与えてくれる共有された集合的なアイデンティティであり、共通の歴史と共有された文化的コード反映している。

より表層的な差異としてのあらゆる他性の根底にあるこの単一性が、「カリビアンらしさ」の、黒人の経験の真実であり本質である。こうしたアイデンティティこそ、カリビアンや黒人が発見し、発掘し、日の目を見させ、映画の表象を通じて表現しなければならないものなのである。文化的アイデンティティのこの種概念は、この世界をきわめて根本的に再構成したあらゆるポスト・コロニアルの闘争の中で非常に重要な役割を果たした。…「隠ぺいされた歴史」は、今日の最も重要な社会運動の勃興—フェミニズムの、反植民地主義の、反人種主義差別の—に際して重要な役割を果たしてきたのである (Hall 1990: 91-92)。

ここでホールはエメ・セゼールやレオポルト・サンゴールなどのネグリチュード運動におけるアフリカ中心主義的な「黒人性」という文化的アイデンティティを例に挙げるが、それは本質主義に基づくアイデンティティであると批判されるものである。しかしながら、ホールが重要だとするのは、こうしたアフリカン・ディアスポラの経験を通じて断片化した黒人の根底における統一性を視覚的に再構築しようという試み (例えばアーティストたちによる写真など) によって、離散と分裂の経験に想像上の一貫性が付与されるという点である。こうした本質主義的な類似性と継続性に根差したアイデンティティ観は、過去への何らかの根拠や繋がりを与えてくれるものだという。

文化的アイデンティティを考察する際の第二の立場とは、反本質主義の議論を踏まえ、文化的アイデンティティがつねに変異することを認めるという立場である。「多くの類似点に加えて、〈実際の私たち〉—むしろ歴史が介在してきたがゆえに〈私たちがなってしまったもの〉—を構築する真相の決定的な差異というものがある、ということ認める」(Hall 1990= 1998: 92-93) というもので、構築主義の議論をも踏まえているといえるだろう。



文化的アイデンティティは確かに歴史を持っているとはされながらも、あらゆる歴史的な物事と同様に常に変異し、それらは何か本質化された過去のようなものに永続的に固定されるということなどはないとされる。こうした立場に立つことで、「黒人や黒人の経験が表象の支配的な実践系の中でどのように定位され、主体・化されるのか」ということが初めて理解されるという。それは文化的アイデンティティを「本質ではなく、一つの位置化 (positioning)」にとらえる立場である。別の言葉では「歴史と文化の言説の内部で創られるアイデンティフィケーションの地点、アイデンティフィケーションや縫合の不安定な地点」で表現される (ibid. 94)。こうした構築主義的なアイデンティティ観は私たちが共有しているものが根本的に非連続の経験に基づいていることを思い起こさせ、歴史的な変遷とともに変化するという非継続性を浮かび上がらせる。

文化的アイデンティティはこうした二つの基軸 (本質主義的／構築主義的) が同時に作動することによって形作られるとして、「二つの基軸の対話的關係」から考えられるべきだと主張される。そして、ホールはアイデンティティを一つの位置化、すなわち過程だと捉え、以下のように述べる。

…アイデンティティを、すでに達成され、さらに新たな文化的実践が表象する事実として考えるのではなく、そのかわりに、決して完成されたものではなく、常に過程にあり、表象の外部ではなく内部で構築される〈生産物〉として考えなければならぬだろう」(Hall 1990= 1998: 90)。

なぜならアイデンティティとは、自分の存在に確実性をもたらそうとする実践であり、文化的諸実践や表象の形態を探求する上で「エスニックである」という文化的アイデンティティは中心にすえられ、問題化される。それは研究の上でも、もちろん人々の文化的実践の場でも中心となっているとしてエスニックと位置づけられる人々と社会の関係を分析することの重要性を主張する研究は枚挙をいとわない。こうしたことから、先で論じたように、エスニック・アイデンティティを、歴史的に構築された表象の構造の中で生産されるものとして認識し、研究することの重要性が確認されるだろう

山腰 (2004; 2012) によると、後期のホールの主眼は「多様な読み」を行う主体が敵対関係という二項対立図式の中にそれぞれ配置されるという過程を分析することに置かれたという。ホールは具体的に、サッチャリズム下のイギリスで黒人及び移民が「マギング (mugging)」という強盗行為の担い手として分類され、「マギング」が当初の「若者犯罪」という定義からマイノリティによる犯罪へと変化していく過程を新聞記事や投書欄の分析から描き出した (Hall 1978)。1978年のマギング論文などでは、例えば文化的・社会的集団である「若者」「黒人」「移民」が、新保守主義によってマス・メディアを介して「国家の内なる敵」と定義される点に、単純な「多様な読み」モデルには回収できない重要な側面を見出した (Hall 1978; 1982 = 2002: 275, 328)。これは、ホールの「意味をめぐる闘争<sup>(16)</sup>」における言説の世界へのアクセスと確立された用語の使用に伴う問題についての部分の議論を支持するものである。このような言葉の連関、言説の編成と主体化のプロセスについての分析は1989年の「〈新時代〉 (“The Meaning of New Times”) の意味」というサッチャリズムについて考察した論文においても行われている。編成過程の中で、サッチャリズムは、特殊な家父長的形態と文化的国民的アイデンティティをめぐる強力で組織化した。「イングランドらしさ」(Englandness)、英国人である (Being British) こと、イングランドの「偉大さをもう一度」(Great again) といったものの擁護は、サッチャリズム人気の源泉の意外な鍵であったとホールは分析した (ibid. 78)。

さらに、「新時代」という多義性を持った言説が提起する問題が左翼を刺激することで、社会変容についての論争の可能性が開かれるとして、左翼が乗り越え転換しようとする社会的条件についての新しい記述と分析の提示を目的にこの論文は書かれている。この論

文においてホールは、時代の流れとサッチャリズムの提供した新自由主義的な考えは同一の状況の中に集められ、この種の歴史的情况が複合的なものであっても、資本主義社会の帰結として新自由主義的な社会が理解されてしまうと論じている。資本の優越、新右翼のヘゲモニー、商品化の進行という別々の過程が一つの単線的な論理の展開として固く結びつけられ、80年代の右翼支配が当然で不可避なものとして映るようにしたというところがサッチャリズムの巧妙な点であるという (Hall 1989=1998: 73) つまり、必ずしも「新時代」に刻印されているわけではない諸状況を、ある形で「新右翼」の政治的プロジェクトへと結び付ける試み、その運動そのものが「新時代」的なものとして力を持発揮していると診断したのである (Hall 1989=1998: 66-79)。つまりこれら新聞記事の分析は、メディア上で行われる言説の構築過程を丁寧に読み解くことで、複数の読みの間にはヒエラルキー的な関係が発生し、他の読みに対して優位に立つような支配的・優先的な読みが存在していくというそのメディア言説の生成過程自体を時代的な流れを反映したものとして考察したものであった。

以上のような時代診断は彼の言語観に基づいて指摘されているものだと考えられる。以下ではホールのディスクール (言説編成) 概念についての理解を深め、彼の提起する批判的コミュニケーションの視座がマイノリティ表象研究にもたらしうる可能性について考察する。

#### 4-2 言説編成と主体構成理論

一般的には、CSは旧来の権力分析ではとらえきれない文化における権力の作用—特に表象を分析の対象とすることで文化をめぐる力関係—を把握しようという志向性を持つとされる。しかしながら先に見たように、CSはその急速な発展の中で細分化し、ホール自身が批判したスクリーン研究のようにその理論的志向性が十分にくみ取られはしなかった。

前述のホールによる二つの分析などは、多くの研究者が借用する狭義の「エンコーディング/ディコーディング」モデルの帰結である単純な「多様な読み」で捉えることのできない複雑な主体と構造の関わり合いを描くものである。それは文化的アイデンティティを表象との照応関係から読み解こうとしたホールの視点を示すものである。

具体的な分析で、ホールはマス・メディアが新保守主義的な考えに基づいた既存の社会集団の分節化と序列化を採用し、再確認・再生産することに寄与していることを指摘した。彼の研究は、「ディスクール (言説<sup>(17)</sup>) が放送従事者を通して自らを語る場合に、イデオロギーは<機能する>のである。意図的ではなく無意識に、放送従事者は、支配的なイデオロギーのディスクール領域の再生産を支持することに貢献している (1982= 2002: 245)」との議論を補強するものである。

ホールにとって言語は、自然の連続体に句読点をつけ文化体系にすることによって、意味を構築するものである (Hall 1982= 2002: 217)。言葉と指示対象の間には自然な対応関係は存在せず、すべては言語使用の習慣と、自然が意味を持ちうるように、言語が自然に介入していく方法によって決定されていると論じている (ibid. 218)。こうした言葉と意味の接合、すなわち言説編成は、世界を認識する際のフィルターとして機能するのと同時に、言説が正当性を持って受け入れられる世界を構成する。「社会の分類図式はイデオロギー的要素とイデオロギー的前提から構成されている」 (ibid. 220)。言説は表面上変化し得るが、変形された言説もまた特定のイデオロギー的構造から生み出されていると言える。こうした変形され表面上は装いを新たにされた言説もある特定のイデオロギー的な傾向から生み出されていることから、既存の構造を維持、再生産する。

…ある言明は、その社会のイデオロギーの枠組みと分類図式を無意識に引用し、再生産している。それにより、引用野菜生産を行っていることに気づくことなく、ある言明がイデオロギーの文法としては正しい形で現れる。発話や個人の発話行為は個人的な出来事だが、言語システム（要素、結合の規則、分類のセット）は社会的なシステムだと構想主義者がいうのは、この意味においてである（Hall 1982= 2002: 220）。

「イデオロギー的なく文法に沿ったもの」にする前提である「深層構造」に焦点を当て、表面に現れることはめったになく、ほとんどの場合無意識のままであるこの「深層構造」を探る試み。現実を現実として受け入れさせる前提、および現実を構成する要素を探ろうとする試み。こうした試みこそがホールが後期において到達した批判的コミュニケーション理論である。

事実を述べ描写する言明は、こうした言明が埋め込まれている内在的な論理（深層構造）を見えないままにしておく。事実を述べる描写的な言明は、反論できないほどの自明性や、明らかに真であるという保証を言明それ自体に与える。実際物事がいかにあるか問うことについての命題は、単なる叙述的な言明という現実の問題へと改称され、またそうした確認が行われる。……言明に伴う論理は吸収されて、その言明がいわばそれ自身で機能しているように見えるのである。言明は、命題をもたない「現実」の自然で自発的な確認であるかのように思われるのである。このように、批判的パラダイムは、ディスクリールのいわゆる「現実」の解剖に着手した（Hall 1982= 2002: 223-224）。

ある言説が優先的に採用され、他の「読み」を退け、世論を勝ち取っていく過程を分析するというホールが具体的に示したマス・メディア表象の分析手法は、マス・メディア表象研究にとって摂取すべきものであると考えられる。それは、歴史的にある表象が生み出され波及し維持・強化されていくその過程を「歴史的構築物としてのマイノリティ表象」に照準するという欠かすことのできない視点の重要性を再確認する作業である。従来のマイノリティをめぐるメディア表象についての研究が、人種主義に対する批判を強調するあまり軽視しがちであった、マイノリティ表象の「意味づけ」をめぐる社会勢力間の言説の接合と再接合の過程、という次元に改めて照準することの意義は大きい。

## ▶ おわりに

本章では社会分析に言説分析を取り入れたスチュアート・ホールの試みを、マイノリティ表象研究の観点からの再評価を試みた。具体的には、現在の主なマイノリティ表象研究の担い手である ES の問題点を指摘し、権力がせめぎあうという CS の視座を、表象と主体化のプロセスについて考察する上での重要な視点として捉えなおした。

マイノリティ表象は、歴史の中で様々な意味に接合されながら変化するものであり、形を変えながら、時にはそこに包摂する人々を拡大しながら、維持されていく。マス・メディアを介して為される表象をめぐる力関係の解明を、主たる分析の目的に据えるというホールの企図は、マス・メディア空間を「闘争と場」として見据えた、自身の、マイノリティ集団に対するマス・メディア表象の言説分析に見ることができた。マイノリティ表象を担うマス・メディアを研究する際、表象と常に照応される形で生成されるという「社会的な主体」としてのマイノリティの姿について描き出す、というホールの設定した視座の重要性は認識されることだろう。

「文化的権力がせめぎあう表象をめぐる闘争の場」として、マス・メディア表象を分析することの意義については本章で再確認されただろう。今後としては、「言説が視聴者もまた確立する」というイデオロギー理論に影響を受けた、「言説と視聴者の共犯関係」と

いう視点から、マイノリティ表象と主体化の過程についての研究が発展することが求められる。表象自体の創出、そうした表象の意味づけが行われるマス・メディア言説の位相、さらには、そうした言説が、さまざまな事象と連関され、新たな意味へと転換していくという時系の流れを踏まえた新たな分析枠組みの確立を目指すことが、メディア表象を扱う研究の理論的發展に向けての課題となるだろう。

## ●注

1. 本章では、マス・メディアによってある一定の方向づけを受けアメリカ社会で広く一般的に共有されている、「(創り出された) イメージ」として表象をとらえることとする。
2. スチュアート・ホールは1989年の「ニュー・エスニシティズ」の中で、「…事物の表象のされ方、そしてある文化にある表象の諸く機制 (machineries) > およびレジームは、単に反事後的な役割ではなく構成的な役割を果たしているのである」と述べている。
3. 例えば国税調査 (センサス) の項目などに使用される。
4. 宮島喬は「彼らマイノリティのマイノリティたるゆえんは、自らの力ではコントロールできない社会的・政治的・文化的構造、および主流者 (majority) の「まなざし」の支配の下に置かれていて、そのなかで限られた選択の範囲で行動していることである」と論じている (2002)。
5. 多様な社会的勢力が現実の定義付けを行う「場」としてのマス・メディアについてホールはさまざまな論文で論じているが1982年の「<イデオロギー>の再発見」において特にそうした考えが示されているといえよう。「意味をめぐる闘争とは、ある側面では、問題を定義する方法、論争の用語、用語に伴う<論理>についての闘争なのである」(Hall 1982=2002: 235)。
6. ホールは認識に対する言葉の権力性に強い関心を示した。特にそれは、言葉の組み合わせを決定すること (言説の編成) が認識に対して及ぼす影響への関心であったといえよう。
7. 例えば、竹沢泰子著『日系アメリカ人のエスニシティ―強制収容と補償運動による変遷―』に対する貴堂嘉之の書評の中では、(狭い意味での) 当事者研究への危惧が以下のように示されている。「注意すべきは、移民たちの過去の再解釈に依拠することで、エスニック・スタディ (ーズ) 自体が社会運動化しているということである。筆者 (竹沢) も指摘しているように、アメリカの大学では現在、メキシコ系がメキシコ系移民研究を、アジア系がアジア系移民研究をするというように民族別に研究者・学生が分かれる奇妙な現象が起きている。各々のエスニシティを背景にして歴史家が積極的に自らのグループの権利獲得のために<自分の歴史>を語る研究が進行している (1996: 126)。」
8. エスニック・スタディーズ (ES) とは60年代末に活発化した「同化論的 (melting-pot) なエスニシティ解釈に対し、人種マイノリティによる『民族自決 self-determination』と『第三世界の被抑圧民族としての連帯』を掲げた『エスニック・スタディーズ』運動から生まれたもの…人種マイノリティの歴史や同時代的状況を『エスニック』な経験として解釈する枠組が定着し、多元的なアメリカ社会像の構築に大きな影響を与えた」とされている (南川 第51回関東社会学会報告)。
9. エスニック・スタディーズと呼ばれる研究には代表的なものとして、「ブラック・スタディーズ/アフリカンアメリカンスタディーズ (Black Studies/ African-American Studies)」、 「ラティーノ・スタディーズ (Latino Studies) / チカーノ・スタディーズ (Chicano Studies)」、 「アジア・スタディーズ (Asian-American Studies)」があげられる (Asante 1998:1-5)。
10. それぞれの学説にしては関根 (1994) の119-152頁を参照のこと。
11. このモデルの名称は引用者による加筆。
12. 本文中では少数民族と記載されている (訳一部改定)。
13. 差別や不利益を被ってきたマイノリティの、職業・教育上の差別是正策、積極的な優遇処置を試みる政策。これまで差別を受けてきた少数民族や女性などのひとびとに対し、入学者や雇用の数に受け入れ枠や目標値を定めて、就学、雇用の機会を保障しようとする積極的な処置をとることを指す。1964年、人種、肌の色、宗教、出身地を理由にした差別を禁止する公民権が成立したが、ジョンソン大統領は差別を禁じただけで問題が即座に解決するとは考えなかったことから、1965年に本政策が大統領行政命令として提言されたという。宮寺 (2006) によると、この考えは、教育を受ける以前に、階層間同様、人種間を背景に起因する能力の不平等が存在するという前提に基づいているという。
14. CSもまた「本当の文化」の想定すなわち「文化の真正性」の借定という問題について批判がなされ、慎重であるべきとの認識はCSの流れをくんだ研究を行う者の間で広く共有されているという (阿部 古川 2011)。
15. 歴史的構築物としての人種・エスニック概念について詳しくは新嶋 (2011) を参照のこと。
16. 闘争とは、ある側面では、問題を定義する方法、論争の用語、用語に伴う<論理>についての闘争なのである (Hall 2002: 235)。
17. ( ) 内は引用者による加筆。

●引用・参考文献

- 阿部潔, 古川彰 2011「社会表象研究の地平—く生きられた文化>へのまなざし—」感性大学社会学紀要第111号, 71-84頁
- Althusser, Louis. 1970, *Ideologie et Appareils Ideologiques d'Etat* (柳内隆・山本哲士訳『アルチュセールの<イデオロギー>論』1993, 三交社)
- Asante, Kete. 1998, *The Afrocentric Ideal* Temple University Press, Philadelphia, pp. 1-5.
- 粟谷佳司 2002「表象と文化的アイデンティティ」同志社社会学研究第6号, 27-41頁
- Bordwell, David. 1997 *On the History of Film Style*, Cambridge: Harvard University Press.
- Chou, S. Rosalind and Joe R. Feagin. 2008, *The Myth of the Model Minority: Asian Americans Facing Racism, Paradigm*.
- Edsall, B. Thomas., and Edsall, D. Mary. 1991 (1992) *Chain Reaction: The Impact of Race, Rights, and Taxes on American Politics*. W. W. Norton & Company, Inc., New York. (飛田茂雄訳『争うアメリカ人種・権利・税金』1995, みすず書房)
- Fiske, J., 1987, *Television Culture*, Verso. (伊藤守他訳『テレビジョンカルチャー』1996, 粹出版社)
- Fong, Timothy. P., 1998, "The Contemporary Asian American experience: beyond the model minority myth" Prince-Hall Inc. New Jersey.
- Glazer, N., 1975, *Affirmative Discrimination: Ethnic Inequality and Public Policy* Cambridge, Mass. Harvard University Press.
- and Moynihan, D. P. 1963, *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians and Irish of New York City*, Cambridge, Mass: MIT Press. (安部齊・飯野正子訳『人種のるつぼを越えて』1986, 南雲堂)
- and Moynihan, D. P. eds. 1975, *Ethnicity: Theory and Experience*, Cambridge, Mass: MIT Press. (内山秀夫訳, 『民族とアイデンティティ』1984, 三嶺書房).
- Heath, Stephen. 1981 *Questions of Cinema*. Bloomington: Indiana University Press, 1981.
- 川島正樹 2005『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版
- 貴堂嘉之 1996「書評 竹沢泰子著『日系アメリカ人のエスニシティ—強制収容と補償運動による変遷—』」『東京大学アメリカン・スタディーズ』東京大学出版会第1号 126-128頁
- Kim, Elaine. 1997, "Korean Americans in U.S. Race Relations: Some Considerations." *Amerasia* 23 (2) , pp69-78.
- Kim, Jean Claire and Taeku Lee. 2001, "Interracial Politics: Asian Americans and Other Communities of Color" *Political Science and Politics*, Vol.34, No.3, pp631-637.
- 桑野真紀 2007「<チカーノ / スタディーズ>をめぐる論争 : <ヨーロッパ中心主義>に抗して」 <[http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/16034/1/070cnerDP\\_020.pdf/](http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/16034/1/070cnerDP_020.pdf/)>
- Hall, Stuart., Charles Critcher, Tony Jefferson, John Clarke and Brian Roberts, 1978, *Policing the Crisis :Mugging, the State and Law and Order*. London: Macmillan
- Hall, Stuart et al eds. 1980a. *Culture, Media, Language: Working Paper in Cultural Studies, 1972-1979*. Routledge.
- 1980b, Hall et.al, *Recent developments in theories of language and ideology: a critical note*.
- 1982, "The discovery of 'ideology': Return of repressed in media studies," in M.Gurevith, T.Bennett, J.Curran, and J.Woolacott, (eds.), *Culture, society and the media*, Methuen. (藤田真文訳「<イデオロギー>の再発見 : メディア研究における抑圧されたものの復活」谷藤悦史 大石裕編『リーディングス 政治コミュニケーション』2002, 一藝社, 215-248頁)
- 1989, "The Meaning of New Times," *New Times* (葛西弘隆訳 スチュアート・ホール『『新時代』の意味』『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 66-79頁)
- 1990, "Cultural Identity and Diaspora" *Identity, Community, Culture Difference*, pp.252-60. (小笠原博毅訳「文化的アイデンティティとディアスポラ」『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 90 - 103頁)
- 1992, "New Ethnicities" Donald, J. & Rattanti., A. "Race," *Culture and Difference*, Sage, pp252-60. (大熊高明訳「ニュー・エスニシティズ」『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 80 - 89頁)
- 1996, "On Postmodernism and Articulation: an Interview with Stuart Hall" ed. Grossberg, pp.45-60. (甲斐聰訳「ポスト・モダニズムと節合について」『現代思想スチュアート・ホール』1998, 青土社, 22 - 43頁)
- Hall, S. (ed.) 1997, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, London: Sage, Publication.
- Laclau, E., 1977, *Politics and Ideology in Marxist Theory*, NLB, (横越英一監訳『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』1985, 拓植書房)
- Light, I.H., 1972, *Ethnic Enterprise in America: Business and Welfare among Chinese, Japanese, and Blacks*, University of California Press.
- Matsuda, Mari.1993. "We Will Not Be Used." *UCLA Asian American Pacific Islands Law Journal* 1. pp79-84.
- 南川文里 2002「アメリカの人種エスニック編成とアジア系移民—「エスニック・ビジネス再考」宮島喬, 梶田孝道編『国際社会4 マイノリティと社会構造』東京大学出版, 頁 45-66
- 2003「エスニック・スタディーズ」の誕生 : アメリカにおけるエスニシティ理論の歴史的文脈」関東社会学会第51回大会 <[http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points\\_section12.html](http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points_section12.html)>
- 2004「アメリカ社会における人種エスニック編成—エスニシティのナショナルな条件」『社会学評論』第55巻第1号
- 宮寺晃夫 2006『教育の分配論—公正な能力開発とは何か』勁草書房

- 宮島喬編 2002『国際社会4 マイノリティと社会構造』東京大学出版会
- Moore, Shaun. 1994. *Interpreting Audiences*. Sage.
- Morley, D., 1998. "So-Called Cultural Studies: Dead Ends and Reinvented Wheels," *Cultural Studies*, Vol.12, pp.476-97.
- 中條献 2004「歴史の中の人種—アメリカが創り出す差異と多様性」北樹出版
- 岡井崇之 2004「言説分析の新たな展開—テレビのメッセージをめぐる研究動向」*マス・コミュニケーション研究* 64, 25-40 頁
- Omi, Michael and Howard Winant. 1994, *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1990s*. Routledge. New York.
- Portes, A. and R. Bach. 1985, *Latin Journey: Cuban and Mexican Immigrants in the United States*, University of California Press.
- Robles, Rowena. 2006, "Asian Americans and the Shifting Politics of Race: the Dismantling of Affirmative Action at Elite Public High School" London, Routledge.
- 佐藤恵 1994「社会的レイベリングから自己レイベリングへ」『ソシオロギス』18, 79-93 頁
- 関根 政美 1994『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版会
- 2003「関東社会学会第51回大会報告概要」< [http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points\\_section12.html](http://kantohsociologicalsociety.jp/congress/51/points_section12.html) >
- Shohat, Ella and Robert Stam. 1994. *Unthinking Eurocentrism and the Media*, London: Routledge.
- Shohat, Ella. 2008, "Stereotype, Representation and the Question of the Real: Some Methodological Proposals." Paper presented at the 12<sup>th</sup> Kyoto University Symposium Transforming Racial Images: Analyses from Representation. Dec 5<sup>th</sup>, 2008 at Kyoto University.
- 竹沢泰子 2005「総論」竹沢泰子編、『人種概念の普遍性を問う—西洋的パラダイムを超えて』人文書院 頁 13-109
- 編 2009『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店
- 宇沢美子 2008『ハシムラ東郷 イエローフェイスの異人伝』東京大学出版会
- 山腰修三 2004「カルチュラル・スタディーズにおける批判的コミュニケーション論の再構成—スチュアート・ホルの視座転換を手がかりにして」『マス・コミュニケーション研究』第64号, 150 - 163 頁
- 2012『コミュニケーションの政治社会学—メディア言説・ヘゲモニー・民主主義—』ミネルヴァ書房
- 山田晴通 1996「CSをどうとらえるか」『地理「特集—文化研究の可能性」』41-12 頁
- 吉見俊哉 2001『カルチュラル・スタディーズ』講談社選書メチエ

---

## ●付記

本研究は卓越した大学院拠点形成支援補助金による「市民社会におけるガバナンス教育研究拠点」(2013年度, 代表者: 萩原能久教授)の成果の一部である。

新嶋良恵 (慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程3年)